

病気から皆が学ぶ



母親は早期大腸がんでした。

腫瘍は複数あるため、4月と5月、2回に分けての入院手術。

5月16日、無事に手術を終えました。

ただ、2cmの腫瘍ということもあり、最悪のケースではリンパ～肝臓転移の
予後不良も想定されます。

写真は5月22日の日曜日。

父子で母親の現状と今後の事など真剣に話し合っている模様です。

「手術はうまくいったから、もう大丈夫だ～」

「あとは引き続き、病院の先生にお任せすればいい～」

では、ありません！

母親の病気を通じて、家族がそこから何を学び、どう変わるか？です。

私「先月今月と、一人暮らしになってみて、どう？」
父「自分が病気ばかりして、妻に頼り過ぎていたことがよくわかった」
私「口うるさい妻にいつも監視されているようで、オヤジなりのストレス・不満もあったとは思いますが、その妻がいなくなって、あ～せいせいした！って思っているかい？」
父「いや、寂しいよ」
私「おふくろのストレスは、夫に対する心配やイライラ。だから心配をかけるオヤジが悪い！ということじゃなくて、本人の神経質・心配性という元来の性格が関係していると思う。
でもね、だからって今からその性格は変わらないし、それが原因と言ったらおふくろは自分を責めて落ち込むと思う。まず変わらなければならないのは頼り過ぎていた自分たちだと思うけど、オヤジはどう思う？」
父「そう思うよ。妻が元気なのが当たり前だと思っていたから」
私「でも結局、食事も洗濯も買い物も、一人でできたじゃない？」
父「そうだね。誰もやってくれないから、やらざるをえないし」
私「オヤジはやればできる男なんだよ！（笑）退院したら、妻になるべく心配かけないように労ってあげてね。ところで振り返ってみて、おふくろと結婚してよかったと思ってる？」
父「うん、感謝している。いなかったら、今頃とっくに自分は死んでいるよ」

親子になって 50 年。
琴線に触れる会話となりました！
これも母が病気した、入院したおかげです。
夫婦が離れたからこそ、父の本音も聞いて
父の頑張る姿が見れました。

うちの両親に限らず、およその夫婦は
相反する者同士が惹かれるようになっています。
我が家の場合、
父親は自分に甘く、人に甘えられる男。
在宅を好み、妻といっしょなら幸せ。
一方、
母親は自分に厳しく、人に甘えられない女。
アウトドア派で社交的。夫の在宅を嫌う。
だから自分が外出する。だけど夫が心配になる。

まあ～早い話、夫婦お互いに“LOVE”
ということなんですね！（笑）



入院している母親とは病室で

私「大腸がんは欧米食、飲酒、運動不足などが原因だと言われているけど、おふくろは和食派でじっとしてられない外出派で太極拳もしていたのになぜこの病気になったと思う？」

母「若い頃からの便秘体質もあると思うけど、やっぱりストレスかなあ～」

私「腸と脳はとっても関係していると科学的にも最近わかってきたからね。とにかく夫に過保護だよ。過保護ゆえのイライラ・ガマンというか」

母「世話をし過ぎるから夫が依存的になった。依存させた自分も悪いと、頭ではわかっているんだけど、つい目が行く、口が出る、してあげてしまう」

私「そうだね、このままだったら、オヤジは志村けんのバカ殿様と同じだよ(笑)。厳しい言い方だけど、オヤジを怠慢にさせているのは、面倒見の良過ぎるおふくろだったりして。退院後は時間的にも心理的にも、少し離れたほうがいいと思うよ」

母「今回自分が病気して、自分の死というものに直面した。今まで夫と違って大病もせず元気だった分、夫にばかり目が行っていたと反省している。これからは自分を一番に大切にしようと思っているから大丈夫よ」

私「2人は男と女が逆だよ(笑) 弱々しく、甘え上手なのが父親でさ。弱々しさ、女々しさ。今回の病気で習得して、夫の前で演じてみたら？」

母「無理だろうね～(笑)」

数年前、友人とハワイ旅行に行く予定が、夫の入院で行けなくなった。その時、「もう、楽しみにしてたのに！」という怒りではなく、どこかホッとしていた母。

「病弱な夫を一人残して、旅に出るのは心配で忍びない・・・」

それくらい夫を愛している。とは聞こえはいいですが、愛情や心配が度を超すと

“執着”となって、自分を苦しめる。そして相手の依存心を大きくしてしまう。

悪しき男尊女卑の教育を受けて育った世代特有なのかもしれませんが時代は平成28年。夫婦も「男女平等」「相互扶助」の時代です。

大正～昭和に活躍した平塚らいてうは名文を残しました。

**『元始女性は実に太陽であった。真正の人であった。
今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、
病人のような青白い顔の月である』**

女性が男性に支配され、ガマンを強いられる時代は終わったのです！

1回目の退院の日



入院してなければ、夫婦で手を取り合い、こんな笑顔になることはなかった！！ 老体病体に鞭打って、夫は毎日妻の病室に通いました・・・(泣)

2回目の術後



去年の父の入院時



今回の母の入院



それぞれ、液体の漢方を調合して飲ませてあげています(笑)
病人と看病人をお互いが経験する。その経験から、さらにお互いを思いやれる。

病気になればこそ、死を意識すればこそ健康の有難さを、家族の大切さを、人の優しさをしみじみと実感します。

私たちは必ず老いて、病んで、死にます。
その事実から目を背けることなく自分を大切に、家族を大切にして愚痴を作らず、日々感謝して生きる。
後悔しない最期を迎えるために！



病気をしないことが尊いのではなく、病気をしてそこから本人と家族が何に気づき、何を学ぶか？ その学んだことが一番尊いのです。